朝日選書
337

神田忙人

『武玉川』を楽しむ

神田忙人

『武玉川(むたまがわ)』を楽しむ

朝日選書 337

神田忙人（かんだ・ぼうじん）
1915年，東京生まれ。慶応義塾大学経済学部卒業。朝日新聞社入社。政治部，学芸部を経て，アサヒグラフ編集長，論説委員などを歴任。「朝日せんりゅう」（東京），「神田忙人の『川柳セミナー』」（週刊朝日）の選者。
著書『川柳の作り方味わい方』（社会保険出版社）

『武玉川（むたまがわ）』を楽しむ　　朝日選書 337

1987年9月20日　第1刷発行
1987年10月30日　第2刷発行　　定価 1200円

著　者　神田忙人
発行者　八尋舜右
印刷所　共同印刷株式会社
発行所　朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地5-3-2　電話 03(545)0131(代表)
編集・図書編集室　販売・出版販売部　振替・東京0-1730

© Bōzin Kanda 1987　Printed in Japan　装幀・多田進
ISBN4-02-259437-3

はしがき

この本は『誹諧武玉川』をわかりやすく解説し、その一万二千二百五十三句のうち一千句を選んで簡単に評釈をしたものである。

俳句に親しむ人、川柳が好きな人、江戸近世文芸に興味をもつ人たちに読んで頂きたいと考えて書いた。学術的な研究書ではない。詳しい考証をしたものではない。気がるに読んで楽しめるように心がけたつもりである。

『誹諧武玉川』(以下『武玉川』と略記)は味わいの深い、おもしろい句集である。一度よむと心をとらえて飽きさせないものを持っている。だが残念なことには、あまり広くは知られていない。これまで紹介されることがあまりにも少なかったので、書名を「むたまがわ」と読むことさえ知らなかった人も少なくないのが実情ではないだろうか。

これほどおもしろい、内容の深い、そして現代人にも新鮮な感銘をあたえる句集が広く読まれていないのは、じつに惜しいことである。ことに江戸川柳に興味をもつ人は必ずよまなければならないものであるのに、『誹風柳多留』は広く愛読されていながら『武玉川』が閑却されているのは、『武玉川』が入手しにくかったこと、紹介、解説書がほとんど無かったためであろう。一九八四年秋から八五年秋へかけて山澤英雄氏校訂の『誹諧武玉川』(岩波文庫)全四冊が

刊行されて、人々の関心も高まってきたように感じられる。しかし難解の句が多く、解説なしではなじみにくいのだが、全句の注解、評釈書は近い将来には刊行されそうもない。実力のある研究者は少なくないが、完璧を期しているためか著書にはまだ接することが出来ない。

浅学菲才をもかえりみず私がこの本を書いたのは右のような事情によるもので、少しでも多くの人に、とりあえず『武玉川』を知って親しんでほしいという気持ちのあらわれである。

『武玉川』には私には解釈できぬ句も多く、およその見当はついても確信のもてない句もまた多いのである。文字の読み方も不明のものがある。この本には私が解し得たと考えた句、およびたぶんこうであろうと推測した句の中から私の好きなものを選んである。研究的な立場ではなく、わかりやすい句、現代人にも味わいやすい句を拾い出してある。当時の風俗、慣習については蛇足かも知れないが老婆心から簡単に解説を加えたものもある。

句には読みやすさを考えて濁点とルビをつけた。しかし江戸時代の感じを多少は残したいという気持ちを捨てきれないので、十六篇以降は原句のままにしてみた。そこでは、かなも原句に濁点が略してある場合はそれに従ったが、見当は容易につくはずである。考えてみるのも興趣のうちと思う。

著　者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

凡例

一、読みやすくするため、原句に現代式に濁点を加え、また漢字にはルビを付した。ただし、十六篇以降は原句のみとした。原句は、山澤英雄校訂『誹諧 武玉川』（岩波文庫、全四冊）に拠る。この本は、現在、一般に入手可能な唯一の、全句収載の活字本である。

二、句の配列は初篇から順次に篇を追っているが、例外もある。

三、例句、引用句は〈 〉で示し、『武玉川』以外の柳句等は出所を記した。その場合、『誹風柳多留』『誹風柳多留拾遺』については『柳多留』『拾遺』と略記した。

四、『誹風柳多留』『誹風柳多留拾遺』、初代川柳選句集（『さくらの実』『川傍柳』『藍姑柳』『やない笛』『柳籠裏』『玉柳』）については、原句は「川柳集成」（岩波書店）に拠りながら、『武玉川』の句の場合に準じて、濁点、ルビを加えた。（右三種の柳書は岩波文庫版もあり、詳細な句の出典等を研究するのでなければ、一般にはこれで足りるのだが、現在は品切になっている）。

『誹風柳多留』の二十五篇以降については、岡田甫校訂『誹風柳多留全集』（三省堂）に拠った。

五、万句合からの引用句については、その年代、相印等は思いきって省略した。

目次

はしがき
凡例
初篇 3
二篇 26
三篇 42
四篇 51
五篇 64
六篇 80
七篇 104
八篇 126
九篇 144
十篇 159

十一篇 176
十二篇 196
十三篇 215
十四篇 229
十五篇 240
十六篇 249
十七篇 268
十八篇 284
『誹諧武玉川』について 303
『誹諧武玉川』『誹風柳多留』対照略年表 317
あとがき 318
索引 320

『武玉川』を楽しむ

初篇

納豆に抱れて寐たる梅の花

正月の盆栽用に早く咲かせる。味噌屋、麹屋などの室に入れて温度を上げる。納豆がたくさんあるから抱かれるとした。特によい句とも思われないが初篇のはじめに掲げたのだから選者の意にかなった句であろう。

嘘をつけとの大三十日来

盆と暮れの支払いは現代ではわからぬ程の重い意味があった。払えぬ者は言い訳に嘘もつかねばならない。嘘をつけ、とは貧しい夫婦の相談の言葉ととれなくもないが、大三十日というものを人格化して、それが嘘をつけと言っていると解したい。

祭が済でもとの明店

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

通りに面した空家は祭りの時は町内の集会所になり人の出入りも多い。酒樽を飾り幕も張っただろう。句は祭りのすんだ跡のさびしくなった気分をあらわしている。川柳に〈又元トの明き店になるまつり過ぎ〉（『川柳評万句合』）がある。川柳には説明的な句が多いが、『武玉川』には七七の短句が多いためもあって簡潔な表現で余情のあるものが多く、これが魅力といえる。

冬籠独口利く唐本屋

冬ごもりは寒風をふせいで家にこもること。主に漢籍を扱うのが唐本屋である。だれも来ない店で低声で音読している、あるいは本の整頓をしながらぶつぶつ独り言をいう。文字も読め理屈もいう男であろうか。ぼそぼそと声がするだけかえって冬のわびしさがある。

取付安い顔へ相談

いまも「あの人は取っつきにくい」などというがその反対の人物。何人か集まってむずかしい話をしている、その時に取っつきやすい人に意見を求めるというのであろう。よくある情景である。

神輿洗って辷る拝殿

儀式として神輿に水を浴びせる祭りもあるが、ほこりを落とすために洗ったのかも知れない。その水が拝殿に流れてすべるほどである。すべるというのはふざけていうのではなく、その清らかさ

をいうのであろう。

丈くらべ手を和らかに提て居

子どもである。あごを引き首筋をのばしているが、手は力をぬいてさげている。明るいおだやかな感じのある句だ。

毛見の艸履に二人取つく

検見とも書く。役人が村々を巡回して豊凶を調べ年貢の高を決める。役人の裁量で決まるのだから、その機嫌をそこねては一大事である。御馳走もし袖の下も使う。休憩所を立ち出る役人に農民が二人とびだして草履をそろえる情景で、役人の威権と農民の悲哀がにじんでいる。このころ年貢の重圧に抗して各地で農民の強訴が起きていた。農民の怒りを内にこめた句である。この種類の句が少ないのは作者が江戸市民であるため、また幕府に遠慮したためであろう。

柏もらいの下手な木登り

柏餅は自分の家で作る。それで柏の木のある家から柏の葉をもらうのだが、木登り下手な男のあぶなっかしい様子である。現在は新暦の五月の節句だから今年の葉はなく塩漬けの葉を使うが、旧暦の時代は新しい葉だから色も匂いもよかった。

低く言高く笑ハおもしろき

ゴシップか、または好色な話題の時にもよくみることである。句は、まず低声で、そして次には高く笑う、というように連続した動作としてよむべきではなく、二つの動作をどちらも面白い、という感じでよむべきであろう。そうでないと理屈っぽい平面的な描写になる。

朝貝の思ひ直して二ツ三ツ

晩秋の朝。もう咲かないだろうと思うころ、二つ三つ咲いた。思い直してと朝顔を人格化したところが面白く、のちの川柳の発想に近いところがある。よく咲いてくれた、と朝顔をほめているような気分がある。

鳶までハ見る浪人の夢

初夢には「一富士二鷹三なすび」というようにこれを見ると縁起がよいとされた。それも富士の夢が一番よいもので、あと二、三の順序だとされていた。茄子がなぜめでたいか不詳だが、駿河の国はその名産地、富士とも縁がある。徳川家康が幼少のころここに人質としていた時に好んで食べたからともいう。鷹は愛鷹山（富士山の南東にある死火山）の意という説もある。浪人の身だから鷹の夢は見られず、せいぜい鳶がいいところというのである。

饅ハいやかとたつた一筆

使いに持たせてきた手紙。達意簡明の文。よほどの親しい仲の友である。フグ中毒も多く、美味だが恐れられていたのだが、この手紙の誘いには応ずるにきまっている。後ろを見せるのか、と言われるわけにはゆかぬ。川柳に〈片棒をかつぐゆふべの饅仲間〉（『柳多留』）。片棒とは駕籠を二人でかつぐ時の一人で、ここでは棺をかつぐ。会食の相手が中毒で急死したのである。〈死なぬかと雪の夕にさげて行〉（『拾遺』）はフグ食いに誘うのに「死なぬか」とふざけたもの。これは幸々評の万句合の句で、初代川柳評万句合の句風に比べ俳諧の味がある。雪の日はフグちり、フグのひれ酒などで体が温まるとされていた。手料理でつくることが多いために危険は少なくなかった。中毒死は怖いが、それだけにかえって人を引きつける魅力もあった。

恥かしい目に嶋台を能覚

島台は洲浜のことで、婚礼の儀式などに用いた松竹梅や高砂の尉と姥などのある飾り台である。古くは食べ物をのせた。花嫁がはずかしい思いで伏目がちにみるなかにも目出たさを象徴する島台だけはよく見えた。上気した様子のみえる句。当時の花嫁のかぶりものの綿帽子は深く、顔の上半部はすっぽり隠れた。現在の角かくしとは違い顔をかくすかわりに、自分からも見にくい。その中で島台だけが鮮やかに目に映ったのである。

羽衣を鮮い手で皺にする

能「羽衣」の天人の羽衣を漁師伯良（白竜とも）がつかんで持って行こうとする。なまぐさくなったはず、という想像の句である。美しいというよりもなまぐさいというところに着目したのが近世であり諧謔なのであろう。

眼薬の貝も淋しき置どころ

ハマグリの貝殻に練り薬を詰めた。目が悪いので室内での動作もものしずかである。貝も部屋の隅の薄暗い棚などにひっそりと置かれている。

一日の機嫌も帯のゞごゝろ

女であろう。朝、帯をきちんとしめる。固すぎず、ゆるすぎず、ぴたりときまると、それで一日中よい機嫌でいられる。微妙な感触である。帯と縁の薄くなった現代人には味わいにくいものになっている。

峠の宿の浅い居風呂

峠の家は狭い土地に小さく建てられ、風呂場も小さく、水の便も悪く、湯の量も少ない。句はそ

れに愚痴をいうのではなく、湯量の少ないのが不満だが水不足と気づき、むしろそこに旅情を味わっているのであろう。

おどりが済で人くさい風

座敷で一人か二人でする上品な踊りではない。多人数の踊りで、それが済むと思い出したように脂粉の香、汗ばんだ体のあついにおいがしてくるのである。

今出た海士のあらい鼻息

長時間、深くもぐっていた海士がすうっと浮かびあがった。

盃出して伯父をしづめる

伯父が小言でも言っていたのか。まあまあおひとつ、と酒をすすめる。むろん酒に目のない人物なのである。

薬にも毒にもならず年男

節分に豆まきをするのが年男で、その年の干支にあたる者、または厄年の者がなるのだが、別にどうという事もない仕事である。節分が過ぎれば忘れられてしまう。武家では新年の門松を立てた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com